

村上春樹「32歳のデイトリップ」(第一回)

・佐野・楯谷・田中・奈原・大藤・本田・渡辺・安

○第二回読書会予定 2024.6.15(土) (13:40~16:00)

○レポート締め切り 2024.7.13(土)

○第二回読書会予定 2024.7.20(土) (13:40~16:00)

【村上春樹全作品版】

32歳のデイトリップ 村上 春樹

123

僕は三十二で彼女は十八で……と考えると、どうしてもうんざりしてしまうことになる。

僕はまだ三十二で、彼女はもう十八……これでもいいのだ。(1)

我々はちょっとした友だちであって、それ以上でもないし、それ以下でもない。僕には妻がいて、彼女にはボーイ・フレンドが六人もいる。彼女はウィークデイに六人のボーイ・フレンドとデートをし、月に一度だけ日曜日に僕とデートをする。それ以外の日曜日には彼女は家でテレビを見る。テレビを見ている時の彼女はせいうちのよう

に可愛い。
彼女が生まれたのは一九六三年で、その年にはケネディー大統領が撃ち殺された。そしてその年に僕ははじめ

て女の子をデートに誘った。流行っていた曲はクリフ・リチャードの「サマー・ホリデイ」だった。

まあそんなことはどうでもいい。
とにかくそんな年に彼女は生まれた。
そんな年に生まれた女の子とデートをすることになろうなんて、その頃にはもちろん思いもよらなかった。今

だってどうも不思議な気がする。月の裏側まで行って煙草でもふかしているような気分だ。

若い女の子って退屈だよ、というのがまわりにいる人々のおおまかな統一見解である。話だって合わないし、反応だって月並みだしさ、と彼らは言う。にもかかわらず連中だってよく若い女の子とデートをする。それでは彼らはやっと退屈ではない若い女の子を捜し出したのだろうか？ いや、そんなわけではない。要するに彼女たちの退屈さが彼らをひきつけるのである。彼らは退屈の水をバケツいっぱい頭から浴びながら、相手の女の子にはじりじり一滴かけないというややこしいゲームをごく純粹に楽しんでいるのである。

少なくとも僕にはそのように思える。
事実、若い女の子たちの十人中九人までは退屈な代物

である。しかしもちろん、彼女たちはそんなことにぜんぜん気づいてはいない。彼女たちは若く、美しく、そして好奇心にみちている。退屈さなんて自分たちとは無縁の存在だと彼女たちは考えている。(2)

やれやれ。
僕はなにも若い女の子たちを責めているわけではないし、また嫌っているわけでもない。それどころか、僕は

彼女たちが好きだ。彼女たちは僕に、僕が退屈な青年であった頃のことを思い出させてくれる。これはなんといふか、とても素晴らしいことである。僕らだってその昔はどうしようもなく、美しくくらい月並みで、退屈だったのだ。(3)

「ねえ、もう一度十八に戻りたいって思う？」と彼女が僕に訊ねる。

「いや」と僕は答える。「戻りたくなんかないな。たとえ幾ら金を積まれても、もう一度十八になんかなりたくないね。」

彼女は僕の答がうまく理解できないようだった。

「戻りたくないって……本当に？」

「もちろん」125

「どうして？」

「今のままでいいからさ」

彼女はテーブルに頬杖をついて考えこみ、考えこみながらコーヒー・カップの中でスプーンをかちやかちやとまわした。「そういうのってなんか信じられないな」

「信じた方がいいよ」

「でも若い方が素敵じゃない」

「たぶんね」

「じゃあどうして今の方がいいの？」

「一度で十分だからさ」

「私はまだ十分じゃないな」

「だって君はまた十八なもの」

「ふうん」と彼女は言う。そして君はもう十八なんだから、と僕は自分に向かってそつと言いつける。(4)

僕はウエイトレスをつかまえて二本めのビールを頼んだ。外は雨で、窓からは横浜港が見えた。

「ねえ、十八の頃って何を考えてた？」

「女の子と寝ること」

「その他には？」

「それだけ」

彼女はクスクスと笑ってからコーヒーをひとくち飲んだ。

「で、うまくいった？」

「うまくいったものもあるし、うまくいかなかったこともある。もちろんうまくいかない方が多かったけど」126

「何人くらいの女の子と寝た？」

「数えてないよ」

「本当？」

「数えたくないんだ」

「私が男だったらきつと数えちゃうな。だって楽しいじゃない」

(行開け)

もう一度十八というのも悪くないな、と思える時だっている。しかし十八に戻ってまず最初に何をしようかと考えてみると、僕にはもう何ひとつ思いつけないのだ。

僕はもし十八に戻ったとしても、何をすればいいか思いつけないのだ。

あるいは僕はもう一度十八になって、三十二歳の魅力的な女性とデートをすることになるかもしれない。これ

なら悪くない。

「もう一度十八に戻りたいと思ったことはありませんか？」と僕は彼女に訊ねる。

「そうねえ」と彼女はにっこり笑って少し考えるふりをする。「ないわ。たぶんね」

「本当に？」

「うん」

「よくわからないな」と僕は言う。「若いというのは素晴らしいことだってみんな言いますよ」

「そうよ、素晴らしいことよ」

「じゃあなぜ戻りたくないんですか？」

「あなたも年を取ればわかるわよ」**[127]**

でもやはり僕は三十二で、一週間もランニングをなまけるとおなかの肉が目立ってくるという状況に置かれている。もう十八には戻れない。これはあたりまえのことだ。

朝のランニングをすませると野菜ジュースを一缶飲み椅子にごろんと横になり、ビートルズの「デイトリップパー」をかける。

「デー—イ・エイ・トリッパー」

あの曲を聴いていると、列車のシートに腰かけているような気分になる。電柱やら駅やらトンネルやら鉄橋やら牛やら馬やら煙突やらガラクタヤらが、どんどん後に過ぎ去っていく。どこまでいったって、たいして変わりばえのしない景色だ。昔はずいぶん素敵な景色みたいに思えたものだけどもな。

隣りの席に座る相手だけが時折変わる。その時僕の隣りに座っていたのは十八の女の子だった。僕は窓際に、彼女は通路側に座っていた。

「席をかわってあげようか」と僕は言う。

「ありがとう」と彼女は言う。「親切なのね」

親切なわけじゃないんだ、と僕は苦笑する。君よりは、ずつと退屈さに慣れているというだけのことなんだよ。ただそれだけのことなんだ。**(5)**

電柱を数えるのにも飽きた

三十二歳の

デイトリップパー。

[128]

これは作り損ねの俳句

1981／8／20

〈語注〉

・デイトリップパー (Day Tripper) ≡ 1965年12月発売のビートルズの楽曲。曲名は、「日帰り旅行者」を意味する英語であると同時に、「ドラッグでトリップする人」という意味も持っている。レノンには「デイトリップパー」というのは、日帰り旅行者のこと。フェリーとかで旅をする人間の事々々。つまり：週末のヒッピーということ。わかるかい？」と語り、マッカートニーも「略」この曲は日帰り旅行者、日曜画家、サンデードライブという感じで、雑多な題材を寄せ集めたお遊びソングだった」と語っている。

〈書誌〉

- ◎ 初出「トレフル」1981年11月号
- ◎ 初版「カンガルー日和」(1983年9月 平凡社)所収
- ◎ 「カンガルー日和」(1986年10月 講談社文庫)所収
- ◎ 「村上春樹全作品 1979～1989」(1991年1月 講談社)所収

【討論の柱】人間にとっての加齢の問題

◎ 18歳が32歳になる(≡加齢)とはどういふことか？

○ 「僕はまだ三十二で、彼女はもう十八に近づいて

① 「僕はまだ三十二で、彼女はもう十八……これどいつの**だ。**」**[123]**

④ 「ねえ、もう一度十八に戻りたいって思う？」と彼女が僕に訊ねる。／「いや」と僕は答える。「戻りたくない。たとえ幾ら金を積まれても、もう一度十八になんかなりたくないね」(略)／「でも若い方が素敵じゃない」／「たぶんね」／「じゃあどうして今の方がいいの？」／「一度で十分だからさ」／「私はまだ十分じゃないな」／「だって君は**まだ十八だもの**」／「ふうん」と彼女は言う。そして君は**もう十八なんだもの**、と僕は自分に向かっ**つてさう**と言っ**添える**。**[124]**～**[125]**

▼ これは一般的には「僕はもう三十二で、彼女は**まだ十八**」となるはずのところだが、僕は「もつ」と「まだ」を逆転させる。これをどう解釈するか？

○ 「若いとは「**退屈**」である」といふこと

② 「要するに彼女たちの**退屈**さが彼らをひきつけるのである。彼らは**退屈**の水をバケツいっぱい頭から浴びながら、相手の女の子には**しずく一滴**かけないというややつこしいゲームをごく純粹に楽しんでいるのである。少なくとも、僕にはそのように思える。」

事実、若い女の子たちの**十人中九人**までは**退屈な代物**である。しかしもちろん、彼女たちはそんなことにぜんぜん気づいてはいない。彼女たちは若く美しく、そして好奇心にみちている。**退屈**さなんて自分たちとは無縁の存在だと彼女たちは考えている。**[124]**

③ 「彼女たちは僕に、**僕が退屈な青年であった頃のこと**を**思い出させてくれる**。これはなんというかと**とても素晴らしきこと**である。僕らだっ**て**その昔は**どうしようもなく美しいくらゝ月並みで、退屈**だったのだ。」**[124]**

⑤ 「席をかわってあげようか」と僕は言う。「ありがどう」と彼女は言う。「親切なのね」**親切なわけじゃないんだ、と僕は苦笑する。君よりはずつと退屈さに慣れているというだけのこと**なんだよ。ただそれだけのことなんだ。**[127]**

▼ 僕は「18歳(若い)を「退屈」と言うが、これは一般的な意味とずれている。現に彼女は自分を退屈と感じていない。僕のいう「**退屈**」のとはどういう意味か？

佐野：「まだ」「もう」

僕は三十二で彼女は十八で……と考えると、どうしてもうんざりしてしまうことになる。

歳の差の大きさにうんざりしている僕は、「まだ」と「もう」をひっくり返すことで、歳の差の開きの大きさを気にしないで済むから、という程度に軽くとっていた。

「退屈」

若さと老い

安：

18歳は特別な歳 青春の反抗期が終わり一気に大人になる32歳が分からなく

もう 過ぎ去った 失っている うらやましさがある

まだ まだ来ていない 過ぎ去っていない 終わっていない 失っていない

32歳はべつの年に変えられるかどうか

退屈さⅡいわゆる退屈さⅡ特別さ

たとえば、恋人たちの間では退屈な会話しか交わさない、一見何の意味も持たない、ありきたりな会話

若い女の子は退屈だⅡ若い女の子は特別だ

本当に退屈なのは32歳の僕であって、

18歳の子は退屈に見えて、その退屈は特別とⅡだ

佐野：彼女には新鮮で特別な事だが、32歳のおじさんにとつてはありきたりのこと

・「惚れたはれた」は特別なことだが、おじさんにはありきたりのことだ

安：そのまとめでよい

村上：

・おじさん自身は若いことを退屈だと思っている

・若い人がそれを退屈と思っておらず、新鮮な特別なことだと思っている

・僕はそのことを知った上で、若いⅡ退屈なことだⅡ僕は**客観的事実と扱う**

・若い人にとつては掛け替えのない若い時である

・年寄りにはそれが退屈な時期としか思えない

安：曲を聴いていると思いだす自分の中に封じ込められた大事なことを頭の中で思い出す。曲を聴いていた時に出て来た18歳の女の子は、先の月一回のデートの相手とは別。僕にとつて18歳の女の子は過ぎ去った失われたものへの思い（懐かしむ気持ち）

年齢は過ぎ去つたらもう戻れない（歳への何か）

過ぎ去る電柱の数Ⅱ過ぎ去った歳の数

渡辺：

・主観と客観のずれについて

・電車で音楽を聴いている、風景を見ているⅡ僕の見ている人生の風景Ⅱもっと素晴らしい風景だと思っているが実は退屈な人生

佐野：要するに彼女たちの退屈さが彼らをひきつけるのである。

▼彼の理由として

彼女たちは若く、美しく、そして好奇心にみちている。退屈さなんて自分たちとは無縁の存在だと彼女たちは考えている。

▼ここがよくわからない

「彼女たちは僕に、僕が**退屈な青年であった頃の**ことを**思い出させてくれる**。「それはなんというか、とても**素晴らしい**」」

▼このことのごが素晴らしいのかわからない

安：「若い」Ⅱ素晴らしいか素晴らしいかは分ける基準はない。本人が様々な理由をつけても、それが理由としてどこまで有効かは疑問。主観的なものに過ぎない。

村上：主観と客観

○18歳の女の子、男の子、僕

…18歳は素晴らしい年齢だ（主観）

○32歳の僕…18歳は退屈だ

・君たちも32歳になればわかる（主観）

・「まだ」「もう」

佐野：

退屈には慣れられるものか？

退屈は本当はともしんどいことではないのか？

僕はなれると言っているが、それへの疑問がある。

退屈さに目覚めることから人間は逃れられない

32歳になってデイトリップパーになっても解決しようのない問題だ。

奈原：今までで一番分りにくい小説だ。

例えば、18歳は年増とみられるシチュエーションなら、

32歳はおっさん。両方とも、高齢者から見れば勝手に考えておられたらよろしいんじゃないですか？社会経済的に見れば、32歳とはこれからバリバリ仕事ができる年齢である。

1981年とは高度経済成長に影が見え始める時期。

僕は三十二で彼女は十八で……、と考えると、どうしてもうんざりしてしまうことになる。

123

僕はまだ三十二で、彼女はもう十八……これでいいのだ。

我々はちよつとした友だちであつて、それ以上でもないし、それ以下でもない。僕には妻がいて、彼女にはボーイ・フレンドが六人もいる。彼女はウィークデイに六人のボーイ・フレンドとデートをし、月に一度だけ日曜日に僕とデートをする。それ以外の日曜日には彼女は家でテレビを見る。テレビを見ている時の彼女はせいうちのように可愛い。

彼女が生まれたのは一九六三年で、その年にはケネディー大統領が撃ち殺された。そしてその年に僕ははじめで女の子をデートに誘った。流行っていた曲はクリフ・リチャードの「サマー・ホリデイ」だっけ？

まあそんなことはどうでもいい。

とにかくそんな年に彼女は生まれた。

そんな年に生まれた女の子とデートをすることになろうなんて、その頃にはもちろん思いもよらなかった。今だつてどうも不思議な気がする。月の裏側まで行つて煙草でもふかしているような気分だ。

若い女の子って退屈だよ、というのがまわりにいる人々のおおまかな統一見解である。話だつて合わない

124

いし、反応だつて月並みだしさ、と彼らは言う。にもかかわらず連中だつてよく若い女の子とデートをする。それでは彼らはやつと退屈ではない若い女の子を捜し出したのだろうか？ いや、そんなわけではない。要するに彼女たちの退屈さが彼らをひきつけるのである。彼らは退屈の水をバケツいっぱい頭から浴びながら、相手の女の子にはしづく一滴かけないというややっこしいゲームをごく純粹に楽しんでいるのである。

少なくとも僕にはそのように思える。

事実、若い女の子たちの十人中九人までは退屈な代物である。しかしもちろん、彼女たちはそんなことにぜんぜん気づいてはいない。彼女たちは若く、美しく、そして好奇心にみちている。退屈さなんて自分たちとは無縁の存在だと彼女たちは考えている。

やれやれ。

僕はなにも若い女の子たちを責めているわけではないし、また嫌っているわけでもない。それどころか、僕は彼女たちが好きだ。彼女たちは僕に、僕が退屈な青年であつた頃のことを思い出させてくれる。これはなんというか、とても素晴らしいことである。僕らだつてその昔はどうしようもなく、美しいくらい月並みで、退屈だつたのだ。

「ねえ、もう一度十八に戻りたいって思う？」と彼女が僕に訊ねる。

「いや」と僕は答える。「戻りたくなんかないな。たとえ

幾ら金を積まれても、もう一度十八になんかなりたくないね」

彼女は僕の答がうまく理解できないようだった。

「戻りたくないつて……本当に？」

「もちろん」

125

「どうして？」

「今のままでいいからさ」

彼女はテーブルに頬杖をついて考えこみ、考えこみながらコーヒー・カップの中でスプーンをかちやかちやとまわした。「そういうのつてなんか信じられないな」

「信じた方がいいよ」

「でも若い方が素敵じゃない」

「たぶんね」

「じゃあどうして今の方がいいの？」

「一度で十分だからさ」

「私はまだ十分じゃないな」

「だつて君はまだ十八だもの」

「ふうん」と彼女は言う。そして君はもう十八なんだから、と僕は自分に向かってそつと言ひ添える。

僕はウェイトレスをつかまえて二本めのビールを頼んだ。外は雨で、窓からは横浜港が見えた。

「ねえ、十八の頃つて何を考えてた？」

「女の子と寝ること」

「その他には？」

「それだけ」

彼女はクスクスと笑つてからコーヒーをひとくち飲んだ。

「で、うまくいった？」

「うまくいったのもあるし、うまくいかなかったこともある。もちろんうまくいかない方が多かつたけど」

126

「何人くらいの女の子と寝た？」

「数えてないよ」

「本当？」

「数えたくないんだ」

「私が男だつたらきつと数えちゃうな。だつて楽しいじゃない」

もう一度十八というのも悪くないな、と思える時だつてある。しかし十八に戻つてまず最初に何をしようかと考えてみると、僕にはもう何ひとつ思いつけないのだ。僕はもし十八に戻つたとしても、何をすればいいか思いつけないのだ。

あるいは僕はもう一度十八になって、三十二歳の魅力的な女性とデートをすることになるかもしれない。これなら悪くない。

「もう一度十八に戻りたいと思つたことはありませんか？」

と僕は彼女に訊ねる。

「そうねえ」と彼女はにっこり笑つて少し考えるふりをする。「ないわ。たぶんね」

「本当に？」

「うん」

「よくわからないな」と僕は言う。「若いというのは素晴

らしいことだってみんな言いますよ」

「そうよ、素晴らしいことよ」

「じゃあなぜ戻りたくないんですか？」

「あなたも年を取ればわかるわよ」¹²⁷
でもやはり僕は三十二で、一週間もランニングをなまけるとおなかの肉が目立ってくるという状況に置かれている。もう十八には戻れない。これはあたりまえのことだ。

朝のランニングをすませると野菜ジュースを一缶飲み、椅子にごろんと横になり、ビートルズの「デイトリップパー」をかける。

「デー——イ・エイ・トリッパー」

あの曲を聴いていると、列車のシートに腰かけているような気分になる。電柱やら駅やらトンネルやら鉄橋やら牛やら馬やら煙突やらガラクタやらが、どんどん後に過ぎ去っていく。どこまでいったって、たいして変わりはええのしない景色だ。昔はずいぶん素敵に景色みたいに思えたものだけだな。

隣の席に座る相手だけが時折変わる。その時僕の隣りに座っていたのは十八の女の子だった。僕は窓際に、彼女は通路側に座っていた。

「席をかわってあげようか」と僕は言う。

「ありがとう」と彼女は言う。「親切なのね」

親切なわけじゃないんだ、と僕は苦笑する。君よりはずっと退屈さに慣れているというだけのことなんだよ。ただそれだけのことなんだ。

電柱を数えるのにも飽きた

三十二歳の

デイトリップパー。

¹²⁸

これは作り損ねの俳句

1981／8／20

32歳のデイトリップ

村上春樹

126

僕は三十二で彼女は十八で……、と考えると、どうしてもうんざりしてしまうことになる。

僕はまだ三十二で、彼女はもう十八……これでいいのだ。

我々はちよつとした友だちであつて、それ以上でもないし、それ以下でもない。僕には妻がいて、彼女にはボーイ・フレンドが六人もいる。彼女はウィークデイに六人のボーイ・フレンドとデートをし、月に一度だけ日曜日に僕とデートをする。それ以外の日曜日には彼女は家でテレビを見る。テレビを見ている時の彼女はせいいうちのように可愛い。

彼女が生まれたのは一九六三年で、その年にはケネディー大統領が撃ち殺された。そしてその年に僕ははじめで女の子をデートに誘つた。流行つていた曲はクリフ・リチャードの「サマー・ホリデイ」だっけ？

まあそんなことはどうでもいい。

とにかくそんな年に彼女は生まれた。そんな年に生まれた女の子とデートをすることになろうなんて、その頃にはもちろん思いもよらなかつた。今だつてどうも不思議な気がする。月の裏側まで行つて煙草でもふかしているような気分だ。

若い女の子って退屈だよ、というのが我々の仲間まわりにいる人々のおおまかな統一見解である。話だつて合

わな 124 いし、反応だつて月並みだしさ、と彼らは言う。にもかかわらず連中だつてよく若い女の子とデートをする。それでは彼らはやつと退屈ではない若い女の子を捜し出したのだろうか？ いや、そんなわけではない。要するに彼女たちの退屈さが彼らをひきつけるのである。彼らは退屈の水をバケツいっぱい頭から浴びながら、相手の女の子にはしづく一滴かけないというややっこしいゲームをごく純粹に楽しんでいるのである。

少なくとも僕にはそのように思える。

事実、若い女の子たちの十人中九人までは退屈な代物である。しかしもちろん、彼女たちはそんなことにぜんぜん気づいてはいない。彼女たちは若く、美しく、そして好奇心にみちている。退屈さなんて自分たちとは無縁の存在だと彼女たちは考えている。

やれやれ。

僕はなにも若い女の子たちを責めているわけではないし、また嫌っているわけでもない。それどころか、僕は彼女たちが好きだ。彼女たちは僕に、僕が退屈な青年であつた頃のことを思い出させてくれる。これはなんととうか、とても素晴らしいことである。僕らだつてその昔はどうしようもなく、美しいくらい月並みで、退屈だつたのだ。

「ねえ、もう一度十八に戻りたいって思う？」と彼女が僕に訊ねる。

「いや」と僕は答える。「戻りたくなんかないな。たとえ幾ら金を積まれても、もう一度十八になんかなりたくないね」

彼女は僕の答がうまく理解できないようだった。

「戻りたくないって……本当に？」

「もちろん」 125

「どうして？」

「今のままでいいからさ」

彼女はテーブルに頬杖をついて考えこみ、考えこみながらコーヒー・カップの中でスプーンをかちやかちやとまわした。「そういうのってなんか信じられないな」

「信じた方がいいよ」

「でも若い方が素敵じゃない」

「たぶんね」

「じゃあどうして今の方がいいの？」

「一度で十分だからさ」

「私はまだ十分じゃないな」

「だつて君はまだ十八だもの」

「ふうん」と彼女は言う。そして君はもう十八なんだから、と僕は自分に向かってそつと言ひ添える。

僕はウェイトレスをつかまえて二本めのビールを頼んだ。外は雨で、窓からは横浜港が見えた。

「ねえ、十八の頃って何を考えてた？」

「女の子と寝ること」

「その他には？」

「それだけ」

彼女はクスクスと笑つてからコーヒーをひとくち飲んだ。

「で、うまくいった？」

「うまくいったのもあるし、うまくいかなかつたこともある。もちろんうまくいかない方が多かつたけど」 126

「何人くらい女の子と寝た？」

「数えてないよ」

「本当？」

「数えたくないんだ」

「私が男だつたらきつと数えちゃうな。だつて楽しいじゃない」

もう一度十八というのも悪くないな、と思える時だつてある。しかし十八に戻つてまず最初に何をしようかと考えてみると、僕にはもう何ひとつ思いつけないのだ。僕はもし十八に戻つたとしても、何をすればいいか思いつけないのだ。

あるいは僕はもう一度十八になって、三十二歳の魅力的な女性とデートをすることになるかもしれない。これなら悪くない。

「もう一度十八に戻りたいと思つたことはありませんか？」

と僕は彼女に訊ねる。

「そうねえ」と彼女はにつこり笑つて少し考えるふりをする。「ないわ。たぶんね」

「本当に？」

「うん」

「よくわからないな」と僕は言う。「若いというのは素晴らしいことだってみんな言いますよ」

「そうよ、素晴らしいことよ」

「じゃあなぜ戻りたくないんですか？」

「あなたも年を取ればわかるわよ」**127**
でもやはり僕は三十二で、一週間もランニングをなまけるとおなかの肉が目立ってくるという状況に置かれている。もう十八には戻れない。これはあたりまえのことだ。

朝のランニングをすませると野菜ジュースを一缶飲み、椅子にごろんと横になり、ビートルズの「デイトリップパー」をかける。

「デー——イ・エイ・トリップパー」

あの曲を聴いていると、列車のシートに腰かけているような気分になる。電柱やら駅やらトンネルやら鉄橋やら牛やら馬やら煙突やらガラクタやらが、どんどん後に過ぎ去っていく。どこまでいったって、たいして変わりはばえのしない景色だ。昔はずいぶん素敵な景色みたいに思えたものだけれどな。

隣の席に座る相手だけが時折変わる。その時僕の隣りに座っていたのは十八の女の子だった。僕は窓際に、彼女は通路側に座っていた。

「席をかわってあげようか」と僕は言う。

「ありがとう」と彼女は言う。「親切なのね」

親切なわけじゃないんだ、と僕は苦笑する。君よりはずっと退屈さに慣れているというだけのことなんだよ。
ただそれだけのことなんだ。

電柱を数えるのにも飽きた

三十二歳の

デイトリップパー。

128

これは作り損ねの俳句

32歳のデイトリップー

村上春樹

133

僕は三十二で彼女は十八で……、と考えると、どうしてもうざりしてしまう。

僕はまだ三十二で、彼女はもう十八……これでいいのだ。

我々はちよつとした友だちであつて、それ以上でもないし、それ以下でもない。僕には妻がいて、彼女にはボーイ・フレンドが六人もいる。彼女はウィークデイに六人のボーイ・フレンドとデートをし、月に一度だけ日曜日に僕とデートをする。それ以外の日曜日には彼女は家でテレビを見る。テレビを見ている時の彼女はせうちのように可愛い。

彼女が生まれたのは一九六三年で、その年にはケネディ大統領が撃ち殺された。そして僕ははじめて女の子をデートに誘つた。流行っていた曲はクリフ・リチャードの「サマー・ホリデイ」だっけ？

まあどうでもいい。

とにかくそんな年に彼女は生まれた。

そんな年に生まれた女の子とデートをすることになろうなんて、その頃には**134**もちろん思ひもよらなかつた。今だつてどうも不思議な気がする。月の裏側までいって煙草をふかしているような気分だ。

若い女の子って退屈だよ、というのが我々の仲間の統一見解である。にもかかわらず連中だつてよく若い女の子とデートをする。それでは彼らはやつと退屈ではない若い女の子を捜し出したのだろうか？ いや、そんなわけではない。要するに彼女たちの退屈さが彼らをひきつけるのである。彼らは退屈の水をバケツいっぱい頭から浴びながら、相手の女の子にはしづく一滴かけないというやつっこしいゲームをごく純粋に楽しんでいるのである。

少なくとも僕にはそのように思える。

事実、若い女の子たちの十人中九人までは退屈な代物である。しかしもちろん、彼女たちはそんなことに気づいてはいない。彼女たちは若く、美しく、そして好奇心にみちている。退屈さなんて自分たちとは無縁の存在だと彼女たちは考えている。

やれやれ。

僕はなにも若い女の子たちを責めているわけではないし、また嫌っているわけでもない。それどころか、僕は彼女たちが好きだ。彼女たちは僕に、僕が退屈な青年であつた頃のことを思い出させてくれる。これはなんといいか、とて**135**も素晴らしきことである。

「ねえ、もう一度十八に戻りたいって思う？」と彼女が僕に訊ねる。

「いや」と僕は答える。「戻りたくなんかないな」

彼女は僕の答がうまく理解できないようだった。

「戻りたくないって……本当に？」

「もちろん」

「どうして？」

「今のままでいいからさ」

彼女はテーブルに頬杖をついて考えこみ、考えこみながらコーヒー・カップの中でスプーンをかちやかちやとまわした。「信じられないな」

「信じた方がいいよ」

「でも若い方が素敵じゃない」

「たぶんね」

「じゃあどうして今の方がいいの？」

「一度で十分だからさ」

「私はまだ十分じゃないな」**136**

「だつて君はまだ十八だもの」

「ふうん」

僕はウエイトレスをつかまえて二本めのビールを頼んだ。外は雨で、窓からは横浜港が見えた。

「ねえ、十八の頃って何を考えてた？」

「女の子と寝ること」

「その他には？」

「それだけ」

彼女はクスクスと笑つてからコーヒーをひとくち飲んだ。

「で、うまくいった？」

「うまくいったのもあるし、うまくいかなかったこともある。もちろんうまくいかない方が多かつたけどさ」

「何人くらい女の子と寝た？」

「数えてないよ」

「本当？」

「数えたくないんだ」

「私が男だつたらきつと数えちゃうな。だつて楽しいじゃない」**138**

もう一度十八というのも悪くないな、と思える時だつてある。しかし十八に戻つてまず最初に何をしようかと考えてみると、僕にはもう何ひとつ思いつけないのだ。

あるいは僕は三十二歳の魅力的な女性とデートをすることになるかもしれない。これなら悪くない。

「もう一度十八に戻りたいと思つたことはありますか？」

と僕は彼女に訊ねる。

「そうねえ」と彼女はにっこり笑つて少し考えるふりをする。「ないわ。たぶんね」

「本当に？」

「うん」

「よくわからないな」と僕は言う。「若いというのは素晴らしいことだつてみんな言いますよ」

「そうよ、素晴らしいことよ」

「じゃあなぜ戻りたくないんですか？」

「あなたも年を取ればわかるわよ」**139**

でもやはり僕は三十二で、一週間もランニングをなまけるとおなかの肉が目立ってくるという状況に置かれていた。もう十八には戻れない。これはあたりまえのことだ。

朝のランニングをすませると野菜ジュースを一缶飲み、

椅子にごろんと横になり、ビートルズの「デイトリップパー」をかける。

「デー——イ・エイ・トリップパー」

あの曲を聴いていると、列車のシートに腰かけているような気分になる。電柱やら駅やらトンネルやら鉄橋やら牛やら馬やら煙突やらガラクタやらが、どんどん後に過ぎさっていく。どこまでいったって、たいして変わりはええのしない景色だ。昔はずいぶん素敵な景色みたいに思えたものだけだな。

隣りの席に座る相手だけが時折変わる。その時僕の隣りに座っていたのは十八の女の子だった。僕は窓際に、彼女は通路側に座っていた。

「席をかわってあげようか」と僕は言う。

「ありがとう」と彼女は言う。「親切なのね」

親切なわけじゃないんだ、と僕は苦笑する。君よりはずっと退屈さに慣れているというだけのことなんだよ。

140

電柱を数えるのにも飽きた

三十二歳の

デイトリップパー。